

馬場南遺跡出土の陶製鼓胴について

松尾史子

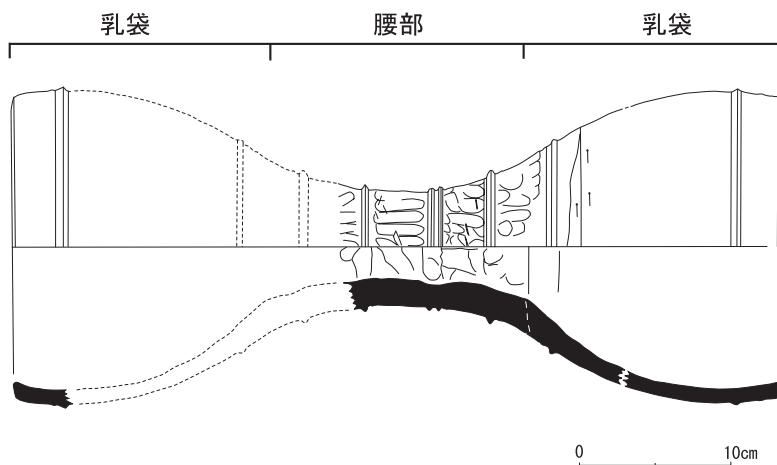
1. はじめに

馬場南遺跡からは万葉歌木簡をはじめ彩釉山水陶器や三彩陶器など多種多様な遺物が出土したが、注目されるものの中に陶製鼓胴がある。鼓胴とは楽器である鼓の本体の部分で、使用する際には両側に皮を張って打ち鳴らすものである。鼓は通常木製であるが、出土品は陶質の焼き物であった。陶製のものは管見の限り日本では発掘調査で出土した例はなく、伝世品として正倉院の奈良三彩鼓胴があるのみである。ここでは、馬場南遺跡出土資料について改めて紹介するとともに類例と比較してその用途について検討してみたい。

2. 馬場南遺跡出土の陶製鼓胴

さて、ここで取り扱う陶製鼓胴は、馬場南遺跡の本堂・礼堂を取り巻くように流れる川跡 S R01 が S 字に屈曲する部分と S R01 の西部に設けられた堤の西側で出土した。出土の層位から第 2 期の最終段階(遺跡の廃絶期)に廃棄されたものと考えられる。

陶製鼓胴は、須恵質で全長 50.8cm に復元できる。全体形は、砂時計のように中央部がくびれて両端の乳袋が漏斗状に膨らむ。出土品は中央部の円筒状の腰部 1 点と乳袋の口縁



第 1 図 馬場南遺跡出土の須恵器鼓胴

部片が2点で、これらはいずれも接合しない。報告書刊行後、別個体ではないかという意見があったため、改めて検討したところ、第1図のように修正復元することとした。復元にあたっては腰部、乳袋のいずれの破片も胎土がよく似ていることから同一個体と判断して復元を試みた。乳袋の口縁端部は2片あったがいずれも1/12程度の破片で口径復元は困難であった。そのため、乳袋については腰部および口縁部片のカーブや厚み等を勘案して復元した。円筒状の腰部はほぼ完全に残っており、中空である。径は7.5cmで器壁は1.4cmと分厚い。腰部は粘土塊の中を削り抜いたのか、粘土紐を巻き上げて成形したのか不明である。外面はタテ方向にミガキのようなケズリを施した後、突帯を回転ナデにより貼り付けている。

内面にはタテおよび不定方向の指ナデがみられる。両端の漏斗状に膨らむ乳袋は推定で口縁部外径20cm、口縁部内径18cmで、腰部に粘土紐を積み上げて成形している。この部分の調整は、内面は回転ナデである。外面は口縁部に最も近い突帯を境に口縁部側は回転ナデで、突帯からくびれ部にかけては回転ケズリである。

突帯については今回の復元案では全部で8条巡ることになり、中心から右寄りの突帯のみ2条で1本の突帯となる。これについては目印として意図的に2条にしたものと考えておきたい。なお、この突帯を中心とする案も試みたが、全体形が対称にならないので良案ではないと考えた。

釉薬や彩色等は施されない。腰部付近に一部赤黒く変色した部分があるが、焼成にともなう変色と考えられる。残念ながら打面に施された皮等は出土していない。

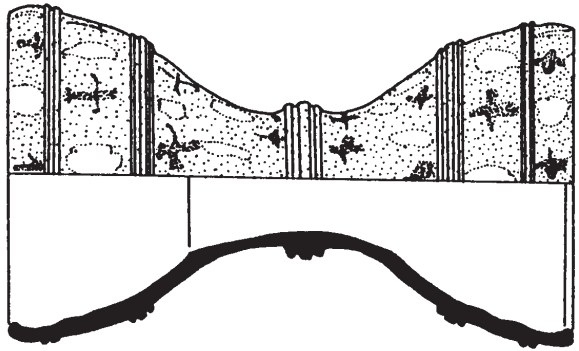
3. 陶製鼓胴の類例

国内での陶製鼓胴の出土は今のところ他に例がない。類似品としては唯一正倉院南倉の宝物に奈良三彩鼓胴が知られるくらいである。この奈良三彩鼓胴は、全長38.1cmで5条の突帯が対称に巡る。皮がどのように張られていたのかは不明である。この鼓胴は、永久5年(1117)の「東大寺綱封蔵見在納物勘検注文」にみえる「三鼓一 青子筒」に対応し、他の三彩とともに羅索院双倉から正倉院南倉に移されたと考えられている。この資料によると後世に何らかの仏教儀式のために持ち出されることがあったようであるが、どのように使用されたのかは定かではない。

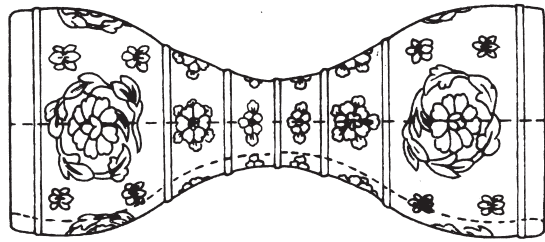
次に国外に目を向けてみると中国・朝鮮半島での出土例がいくつか確認できたので紹介しておきたい。

①中国：陝西省唐憲陵(李憲墓)出土資料(第2図2)

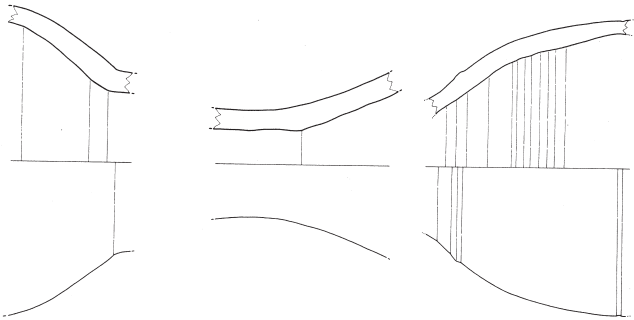
李憲墓は唐の玄宗皇帝の兄の墓で、墓道沿いの壁龕^{へきがん}の一つから完形の陶製鼓が2個体



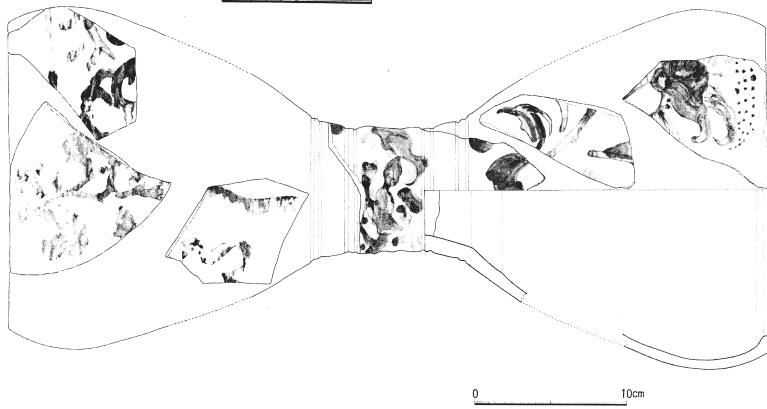
1. 正倉院三彩鼓胴



2. 李憲墓出土腰鼓



3. 龍仁市西里窯跡出土
高麗青磁長鼓



4. 龍仁市西里窯跡出土
高麗鉄絵青磁長鼓

第2図 鼓胴の類例

出土している。1点は全長35.5cm、両端口径14.5～15cm、腰径5.8cm。もう1点は全長39.7cm、両端口径17cm、腰径7.8cmである。くびれ部から両端にかけては漏斗状に膨らむ。

いずれも泥質紅陶製で、白色や緑色の花が描かれている。埋葬時には皮も張られていたようで、出土時に両端に張られた皮の一部や鉄製縁環が遺存していた。8世紀中頃の資料とされる。

②中国：陝西省西安市東郊紡織城出土資料

全長65.8cm、口径22cmの黒釉彩班腰鼓で、唐代の耀州窯で焼かれたものと考えられている。ややくびれ部が長い。突帯が全部で7条対称に巡る。従来この手のものとしては河南省魯山窯産が多く知られていたが、他にも産地があったことを示す貴重な資料である。故宮博物院所蔵の黒釉腰鼓とよく似ている。

③中国：故宮博物院所蔵魯山窯黒釉腰鼓(写真1)

全長58.9cm、口径22.2cmで全体に7条の突帯が巡る。黒釉の素地に白釉の斑点を施す。『中国陶窯史』によると河南省にある唐代の魯山窯より出土したものである。同様の腰鼓については山西省交城窯でも確認されているようである。

④中国：故宮博物院所蔵唐青釉腰鼓

青磁の腰鼓である。全長17cm、口径9.8cmと小振りであることからミニチュアの可能性がある。3条の突帯が巡る。

⑤韓国：京畿道龍仁市西里窯跡出土資料(第2図3・4)

合計6個体分の長鼓が報告されている。5個体分は青磁と考えられる資料で、破片のため全体形およびその規模は不明である。くびれ部から両端にかけては漏斗状に膨らむ。報告では10世紀ぐらいの年代観が示されている。残りの1点は鉄絵で、全長約49cmに復元されている。器壁は0.5cmと薄造りである。両側はラッパ状に開き口縁端部を巻き込むように内傾する。4条の突帯が巡る。詳細な時期は不明であるが、焼き物として鉄絵のほうが時期的に後出するようなので、くびれ部から両端にかけての膨らみ具合が漏斗状からラッパ状に変化する可能性も考えられる。他にも始興市芳山洞窯跡や驪州郡中岩里窯跡で鼓胴が出土している。

⑥韓国：莞島沈船資料

朝鮮半島西南海岸で沈没した船から11世紀後半から12世紀後半の朝鮮半島で生産された陶磁器が引き上げられた。これらは沿岸の地方官衙や寺院に供給されたようで、中には青磁鉄絵牡丹文長鼓がある。

以上の史料の年代については、①は8世紀代、②から④は唐代のもので、宋代の窯跡でも青磁腰鼓の出土例がある。韓国の龍仁市西里窯跡出土の青磁腰鼓は、報告によると10世

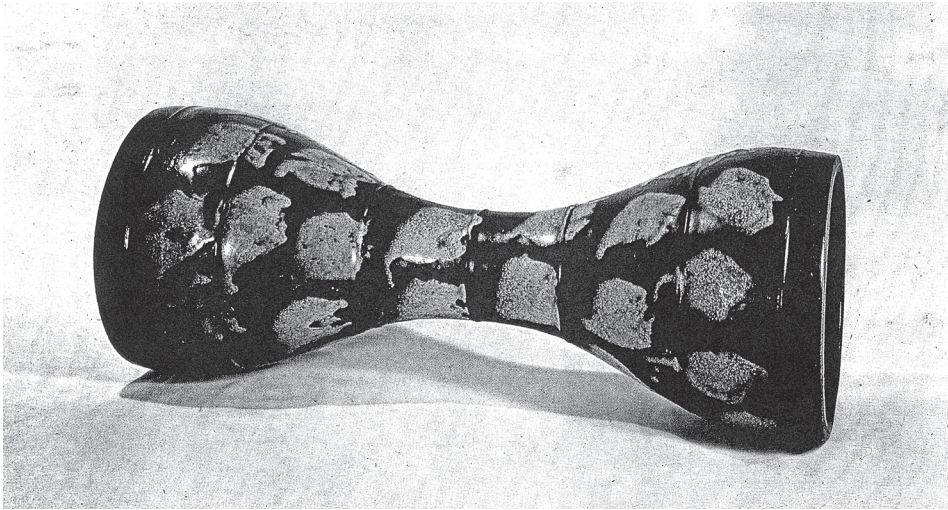


写真1 故宮博物院所蔵黒釉腰鼓

紀ごろとされている。また、莞島沈船高麗鉄絵青磁腰鼓は11～12世紀後半ごろの年代が与えられている。

このように東アジアに目を向けてみると少なくとも中国では唐代から宋代には陶器製の鼓が少ないながらも存在している。韓国でも中国の影響を受けて高麗青磁が焼かれるようになった10世紀ごろには腰鼓が生産されていたようである。これらの出土地は生産地である窯跡が多く、あとは墓や地方豪族や寺院向けの積荷であることから、社会的に上位の階層の人々の嗜好品的性格をもっていたのではないかと考える。

ここで改めて馬場南遺跡出土資料とその他の資料を見比べてみたい。いずれの資料も乳袋の膨らみ具合は基本的に腰部から漏斗状に膨らみ、突帯についてはシンメトリーに配置されている。馬場南遺跡出土資料は、全体のプロポーションとしては李憲墓出土資料や故宮博物院所蔵魯山窯黒釉腰鼓とよく似ており、口径率(口縁部外径/全長)は李憲墓とほぼ同じである。

4. 陶製鼓胴の用途について

さて、鼓は、広義には胴に皮を張った膜鳴楽器を指し、狭義にはこのうち、胴がくびれ、皮に鉄製の杵をあてて調緒を通し張力を加減するものを指す。ここで鼓とするのは、馬場南遺跡出土資料が後者にあたることから、特に説明がないかぎり狭義の鼓である。

鼓は、今日の雅楽では日本在来の歌舞ではなく外来の楽舞である唐楽や高麗楽で使われる。古代日本の楽制をみても、やはり在来の倭楽には鼓は見え、外来系の呉楽や唐

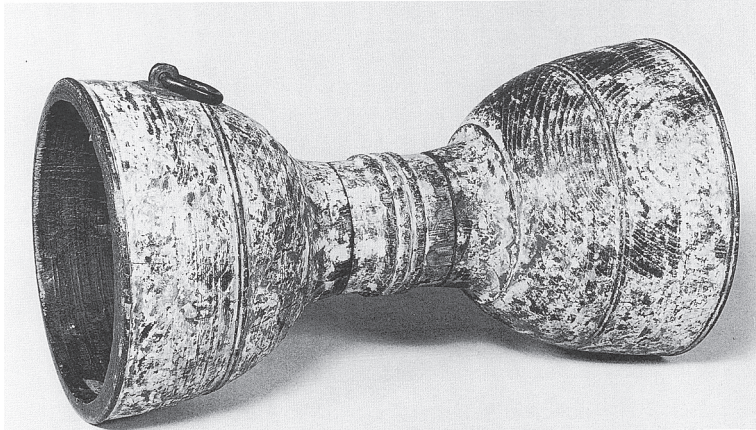


写真2 法隆寺献納宝物彩絵鼓胴

楽に鼓師が編成されている。鼓はこれらの外来音楽とともに日本に伝えられた楽器なのである。

ここで鼓に関する文献資料をみてみたい。『養老令』職員令雅楽寮によると朝廷での儀式や宴会のために楽人が編成されていて、その中には腰鼓師が二人いて腰鼓生二十人を教えていた。この腰鼓は「くれつづみ」とよばれ、呉楽に使用された鼓である。後述するが、呉鼓は正倉院宝物に伝世されている細身の鼓(細腰鼓ともいわれる)で、馬場南遺跡出土資料とは形状が異なる。

また、奈良時代には朝廷の他に諸大寺が各自楽団を持っていて法会等で奏楽していたようで、宝亀11年(780)の『西大寺資材流記帳』には西大寺が所蔵していた楽器が詳しく記載されている。そこには、呉鼓が60具、唐楽用の腰鼓が7面あり、呉楽の鼓は呉鼓、唐楽の鼓を腰鼓と区別して記述されている。これは両者の形状が異なることを反映しているであろう。この数から考えると、当時かなりの数の鼓が存在していたはずである。

正倉院文書の楽具欠失解や欠失物注文に「鼓」がいくつかあがっており、破損しやすい楽器であったことがわかる。文献には材質まで記載したものはないが、木製の鼓が法隆寺や唐招提寺、正倉院宝物に伝えられていることから奈良時代に彼らが使用していた鼓はおそらく木製であろう。残念ながら木製の鼓は発掘調査では出土しにくいものである。

正倉院宝物には呉(伎)楽用の細腰鼓と唐楽用の鼓があり、両者は明らかに形状が異なる。前者は中心から両端に向かってゆるくラップ状に開くもので、後者は馬場南遺跡で出土したような2つの椀を筒でつなぎ合わせたような形状で唐楽用の鼓である。また、鼓皮やその皮を綴じ付けた鉄輪、調緒の残欠が2点ある。

また、法隆寺献納宝物には木製の彩絵鼓胴が2点(写真2ほか)あり、形状から唐楽用と

考えられる。これらは奈良時代後半の時期に製作されたと考えられている。これらの木製彩色鼓胴には鍔金具がついており、頸からつり下げて使用していたことが明らかである。

実用性の面から考えると木製に比べ陶器の鼓は重くて使いづらいし、音響もよいとは思えない。陶製の鼓が実用品であるならばもっと出土例があってもよいはずである。基本的に陶製鼓は木製品を模倣して作られたもので、非実用品であったのではないだろうか。

4. まとめ

馬場南遺跡出土鼓胴について検討するにあたり、日本に伝世する木製の鼓胴と中国や韓国で出土した陶製鼓胴をいくつか紹介し、比較してみた。

奈良時代には寺院が楽人とともにかなりの楽器を所有していたが、それは木製品であると考えられる。陶製の鼓胴の出土例が今後増えるとしても実用品であったことを証明するだけの数にはならないだろう。また、中国や韓国での出土例をみると、現在のところ窯跡や墓での出土が主体である。日本に比べて需要があったことは確実であるが、故宮博物院所蔵唐青釉腰鼓のように明らかにミニチュアと考えられる資料が存在することや高麗青磁の特質から明器や奢侈品という非実用品としての性格が強かったのではないかと考えられる。正倉院の三彩鼓胴も奈良三彩の用途から鑑みると、他の奈良三彩とともに何らかの儀式にともない奉納されたものであり実際に演奏で使用されたものとは考えにくい。

最後に、馬場南遺跡出土資料は、誰かの供養のために寺に奉納されたと考えると加飾がほとんどなく、どちらかといえば質素な感じがする。彩釉山水陶器や三彩陶器など彩り鮮やかな遺物がある一方で、出土した厨子は簡素な作りのものであったし、黒漆塗りの箱も漆をふんだんに塗り重ねた豪華なものではなかった。この遺物のアンバランスさは何に起因するのであろうか。謎の寺、神雄寺の実態に迫る一つの材料として興味深い。

(まつお・ふみこ＝当調査研究センター調査第2課調査員)

参考文献

- 『馬場南遺跡 京都府遺跡調査報告集』第138冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
2010
- 中国硅酸盐学会編『中国陶瓷史』文物出版社 1982年
- 『龍仁西里高麗白磁窯 発掘調査報告書I 湖巖美術館 研究叢書1』三星美術文化財団・湖巖美術館 1987
- 『高麗青磁の誕生－初期高麗青磁とその周辺－』大阪市立東洋陶磁美術館 2004
- 陝西省考古研究所編著『唐李憲墓発掘報告 陝西省考古研究所田野研究報告』科学出版社 2004

『大唐皇帝陵 檀原考古学研究所附属博物館特別展示図録』第73冊 2010

『楽器 法隆寺献納宝物特別調査概報』XIV 平成5年度 東京国立博物館

林 謙三『正倉院楽器の研究』風間書房 1964

渡辺信一郎「平等院鳳凰堂と音楽遺産－諸菩薩・諸尊は如何なる音楽を演奏しているか－」(『南山城・宇治地域を中心とする歴史遺産・文化的景観の研究』京都府立大学文化遺産叢書 第1集) 2009

渡辺信一郎「雅楽の来た道－遣唐使と音楽－」『東アジア世界史研究センター年報』第2号 2009

松田和晃編著『古代資材帳集成 奈良朝』すずさわ書店 2001

「東大寺綱封蔵見在納物勘検注文」『大日本古文書(編年文書)』25

「西大寺資材流記帳」『寧楽遺文』

『東アジア中世海道－海商・港・沈没船－』国立歴史民俗博物館 2005

『正倉院の楽器』日本の美術 117 至文堂 昭和51年